

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2013～2015

課題番号：25704010

研究課題名(和文)第二次世界大戦に関する新たな視座構築を目指した日本=アフリカ間の双方向的研究

研究課題名(英文)An Interactive Research Project Between Japan and Africa Towards Creating a New Perspective on World War II

研究代表者

溝辺 泰雄(MIZOBE, YASU'O)

明治大学・国際日本学部・准教授

研究者番号：80401446

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 5,200,000円

研究成果の概要(和文):本研究において報告者は、第二次世界大戦とその直前期におけるアフリカの言論空間における「日本観」と日本の言論空間に表出した「アフリカ観」の検討を日本とアフリカ双方の史料に基づきおこなった。新聞・雑誌等のメディアに加え、官民による調査報告書等も参照し分析を進めた結果、同時期のアフリカの言論メディアが英国植民地当局の厳しい検閲のもと「日本」を敵視する論調に報道内容を一気に変更した一方、日本の言論メディアは、自国の膨張主義を正当化する意図で、アフリカにおける「米英の帝国主義」を否定し、ビルマ戦線に派遣されたアフリカ人兵士については一貫して「米英の帝国主義」の被害者として扱ったことが明らかにされた。

研究成果の概要(英文): Since 2007, I have been conducting research projects on Japanese-African relations during WWII, based on the analysis of local media in both Africa (mainly the British Gold Coast [now Ghana]) and Japan. This project, which started in April 2013, clarified that the Gold Coast media suddenly changed its stance towards Japan, going from describing Japan as a successful model of modernization in the non-Western world to depicting it as a savage enemy, partly due to severe censorship by the British colonial authorities; the Japanese media, on the other hand, continued to describe Africa and Africans as victims of US and British imperialism in order to justify its own expansionist policy and invasions of other Asian countries. This research report was presented at international academic conferences in Russia(Institute of African Studies, Russian Science Academy) and Jamaica (University of West Indies); and an academic paper based on the above mentioned report was published in 2015.

研究分野：近現代アフリカ研究・日本アフリカ関係史

 キーワード：アフリカ史 日本アフリカ関係史 第二次世界大戦 アフリカの新聞・メディア アフリカ人兵士 イ
 ンド・ビルマ戦線 日本人のアフリカ進出 ガーナ

1. 研究開始当初の背景

報告者は、明治大学国際日本学部専任講師に着任した2009年、「英領西アフリカの現地新聞の分析を通じた第二次世界大戦期の日本アフリカ交渉史研究」(以下、パイロット研究とする)が若手研究(スタートアップ)に採択され、第二次大戦期の主として英領黄金海岸(現ガーナ)の現地発行新聞における日本報道の変化とその背景を、植民地当局による「検閲」に焦点を当て分析を進めた。その結果、(1)第二次大戦期の黄金海岸では、情報局を中心に親ナチズム(枢軸国)的言論行為及び連合国軍の軍事情報報道などに対して厳格に規制がおこなわれ、それが「日本」に対する論調の変化の一因となったこと、(2)新聞用紙が配給制となったことで、出版事業も手がける新聞社は事業の存続のために当局の検閲に「協力的」な姿勢をとったこと、さらに(3)その一方で当局による検閲は、アフリカ人民族主義に関する言論活動に対して比較的寛容で、大戦中も紙上では民族主義運動の宣伝がおこなわれていたこと、を確認した。この研究結果をまとめた論考は、国内外の研究集会での発表の後に、大学院生時より研究上の助言を受けている英国・ロンドン大学のD. キリングレー名誉教授の近著(*Fighting for Britain*, James Curry, 2010)に引用され(同書 p.78)、南アフリカ・アフリカ社会先端研究センター(CASAS)のK.K. プラー教授の推薦を得て、同センターの査読付き学術誌に掲載された。

パイロット研究の期間中の2008年に参加した国際ワークショップにおいて知己を得たナイジェリア大学ンスカ校(以下、UNNとする)のC.C. オパタ講師から、第二次大戦中にナイジェリア南東部のエヌグ州で第二次大戦中に「Japan Road」と命名された街区が現在も地名として残っている旨の情報提供を受け、同氏の協力のもと、直接現地を訪問する機会を得た。さらに、ガーナ国立公文書館(PRAAD)における文献調査では、同館の1930年代及び40年代の史料目録を一点ずつ全て確認した結果、同大戦期の黄金海岸に捕虜として抑留された3名の日本人に関する文書群(PRAAD [Accra] CSO23.2)の存在を確認するに至った。

パイロット研究に続いて2011年に採択された若手研究(B)「『アフリカから見た第二次世界大戦期の日本』研究の構築に向けた基礎的研究」(以下、前プロジェクトとする)では、ガーナに加えて東アフリカ(ケニア)の言論メディアにおける日本観の変遷に関する調査を実施した。これに加え、黄金海岸に抑留された日本人捕虜に関する調査、及び、ガーナ国立軍事博物館(クマシ)に収蔵・展示されている第二次大戦期のインド=ビルマ戦線から持ち帰られた旧日本軍の国旗、軍票、武器・火器類などの調査も実施した。後者に関しては、同館館長のM.O. トゥエネボア=コドゥア氏の協力のもと、同館が保有する全ての日本

軍関連物品の種類・個数を調査し、同館の展示の意図についても、館長とのインタビューで詳細な説明を受ける機会を得た。

前プロジェクトの期間中、報告者は海外の研究者との交流のなかで、大戦中の日本における「アフリカ観」の変化について頻繁に質問を受けるようになった。そこで報告者は2012年7月、ナイジェリアで開催された国際学会において、戦時下の日本の新聞(『東京日日新聞』)によるアフリカ報道に関する論文を発表した。この発表に対し、東南部アフリカの軍事史が専門のT. スティブルトン教授(カナダ・トレント大)から強い関心を寄せられた。氏との意見交換のなかで、ジンバブウェ、ザンビア、マラウィといった東南部地域のアフリカ人兵士に関する史料状況の情報を得た報告者は、ジンバブウェ国立公文書館(ZNA)での史料調査を実施した。そこで報告者は、ビルマ戦線に派兵されていた「ローデシア・アフリカ人ライフル部隊」の兵士が前線から親族に宛てた書簡群(ZNA, RG3|DEF4)を収集した。ここにはビルマ戦線での日本軍兵士についての記述も多く、第二次大戦期の「日本観」の検討にとって重要な史料であることが確認された。

2. 研究の目的

パイロット研究及び前プロジェクトを経て、報告者は次の3点について認識を強めるに至った。まず、(1)第二次大戦期の日本アフリカ交渉史研究は国内外の研究において未着手の部分が多く、研究成果への期待が高いこと、(2)海外の研究者からは、同時期のアフリカ側の「日本観」の変遷のみならず、日本の「アフリカ観」の変遷についても極めて強い関心が寄せられていること、さらに、(3)インド=ビルマ戦線に従軍したアフリカ人兵士の記録と記憶を辿るための情報は、元従軍兵士の高齢化と文書館における文書史料の傷みの進行具合から鑑みて消失の危機に瀕していること(それにより、アフリカにおける日本の「過去」を伝える貴重な史料が消失する危険にさらされていること)、の3点である。本研究は、これら3点の要請に応えるべく構想されたものである。

3. 研究の方法

本研究は、第二次大戦期の日本とアフリカにおける「交錯する双方の認識」の変遷とその背景を、日本とアフリカの言論メディアの報道・記述とインド=ビルマ戦線における「意図せざる交戦」に関わった兵士たちの記録・記憶の分析・検討を通して、明らかにすることを目指している。報告者は本研究の開始時点で、それまでに実施していたパイロット研究と前プロジェクト期間中の調査で、ガーナとケニアにおける文書史料の収集を完了させていた。そのため本研究では、(1)東部アフリカ(ケニア)で発行された出版物と政府文書(宣伝パンフレットやラジオ放送原稿)

に表出する「日本」関連情報の収集・整理、(2)戦前・戦中期日本の言論メディアが描く「アフリカ」関連情報の収集・分析をおこなった。ここで得た情報をこれまでの研究蓄積と統合することにより、文書史料に関しては英領の西部と東部のアフリカ植民地の事例の比較研究が可能となる。さらに日本と西アフリカにおける官民発行の報告書などの調査結果を照合させることで、文書史料から得られる、日本と旧英領アフリカ地域の「イメージの交渉史」の全体像を解明することも可能となる。

4. 研究成果

上記の背景・目的のもと開始された本研究で、報告者は第二次大戦とその直前期(1930年代後半)における日本の言論空間に表出した「アフリカ観」の検討を集中的に実施した。新聞・雑誌等のメディアに加え、官民によるアフリカ地域調査報告書等も参照し分析を進めた結果、次の事実が確認された：

(1)同時期の日本の言論メディアは、アフリカにおける「米英の帝国主義」を否定し、ビルマ戦線に派遣されたアフリカ人兵士については一貫して「米英の帝国主義」の被害者として扱った。

(2)しかしその一方で、アフリカ人を指す際にしばしば「土人」という言葉が用いられていることに端的に現れているように、アフリカに対する優越意識を示す表現が散見された。

(3)さらに、「大東亜共栄圏」の名の下に、北東及び東南アジアへの占領政策を進めた日本政府に対して、日本の言論メディアは(政府の検閲の影響もあり)「興亜」の文脈で支持を続けた。

(4)アフリカにおける「米英の帝国主義」は否定し、自国の膨張政策は否定しないという矛盾する立場は、欧米諸国との対抗意識を主軸に据えた当時の日本の世界観を反映したものであった。

(5)それゆえ、第二次大戦期の日本の言論メディアは、アジアにおける自らの膨張政策を正当化するために「英米の帝国主義の被害者」としての「アフリカ」を利用したとも言える。

報告者は、上記の研究成果をロシア科学アカデミーや西インド諸島大学(ジャマイカ)での国際学会で報告した。さらに本研究期間中に、先述のナイジェリアで開催された国際学会において報告した、戦時下の日本の新聞によるアフリカ報道に関する論文が、100を超える発表論文のなかから選抜され、内容の一部加筆修正作業の後、2015年に米国の出

版社から出版された論集の1章として掲載されるに至った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 溝辺 泰雄、第二次世界大戦期のビルマ戦線に出征したローデシア・アフリカ人ライフル部隊(現ジンバブウェ)のアフリカ人兵士からの手紙：全文訳(2/2)、明治大学国際日本学研究、査読有、Vol.7、No.1、pp. 65-86

2. 溝辺 泰雄、第二次世界大戦期のビルマ戦線に出征したローデシア・アフリカ人ライフル部隊(現ジンバブウェ)のアフリカ人兵士からの手紙：全文訳(1/2)、明治大学国際日本学研究、査読有、Vol.6、No.1、pp. 235-256

〔学会発表〕(計4件)

1. MIZOBE, Yasu'o、Discussant for the first session "Between Imperialism and Colonialism: Imperial Rivalry and Politics on the Ground."、30 July 2015、"Russia and Global History," Slavic-Eurasian Research Center 2015 Summer International Symposium、Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University

2. MIZOBE, Yasu'o、Analysis of the Bank's Role in the Japanese Penetration into African Market in the Interwar Period (1920s and 1930s): The Case of the Yokohama Shokin Ginko、28 May 2014、The 13th International Conference of Africanists "Society and Politics in Africa: Traditional, Transitional, and New"、Institute for African Studies, Russian Academy of Science, Moscow, Russia

3. MIZOBE, Yasu'o、A History of Intellectual Relations between Africa and Japan during the Interwar Period and World War II with special reference to Takehiko Kojima and Minosuke Momo、24 May 2014、日本アフリカ学会第51回学術大会、京都大学百周年時計台記念館

4. MIZOBE, Yasu'o、Pan-Africanism and African Nationalism Studies in Japan during the First Half of the Twentieth Century: A History of Intellectual Relations between Africa and the Far East、24 April 2014、The 9th CBAAC International Conference on "Toward A New Pan-Africanism Deploying Anthropology, Archaeology, History and Philosophy in the Service of Africa and the Diaspora"、University of the

West Indies, Mona Campus, Kingston,
Jamaica

〔図書〕(計3件)

1. 石川博樹・小松かおり・藤本武 編、昭和堂、食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る、2016、291-309 (第12章「脱植民地化のなかの農業政策構想：独立期ガーナの政治指導者クワメ・ンクルマの開発政策から」を執筆)

2. Gloria Chuku, ed., Carolina Academic Press、Ethnicities, Nationalities, and Cross-Cultural Representations in Africa and the Diaspora、163-182 (Chapter 9 "Japanese Newspaper Coverage of Africa (and African Soldiers) during World War II: The Case of the *Tokyo Nichi Nichi* (*Mainichi*) *Shimbun*, 1939-1945"を執筆)

3. 日本アフリカ学会 編、昭和堂、アフリカ学事典、148-151 (「植民地支配」の項を執筆)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)
なし

取得状況(計 件)
なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

溝辺 泰雄 (MIZOBE, Yasu'o)

明治大学・国際日本学部・准教授

研究者番号：80401446